スポーツの再社会化促進イベントが地域の「まちづくり」に及ぼす影響に関する実証的研究

―高校ラグビーＯＢ大会による地域活性化スポーツイベントとしての開催効果に着目して―

舩越達也*
藤本淳也**　永松昌樹***　長ヶ原誠****　佐々木康*****

抄録

本研究の目的は過去のスポーツ競技経験者に対して、再び同一種目への競技復帰(再社会化)を促すスポーツイベントの開催が競技復帰者の増加やイベント開催地周辺においてスポーツを通じた地域活性化にどのような効果をもたらす可能性があるのかについて検討することである。また、スポーツの再社会化を促進するスポーツイベントの開催が大会運営を支援するボランティアといった競技者以外の参与者を巻き込むことで地域におけるスポーツを通じたまちづくりにどのような影響を及ぼす可能性が期待できるのかを検討することである。

調査の結果、競技から離脱しているスポーツ経験者に対して競技復帰の機会を提供するイベントの開催をすることで、出場者がその後の継続的参加意思を示す割合は大きく、復帰機会の提供は競技経験者の競技復帰を促す可能性を示すとともに中高年者を対象とした競技経験者の復帰機会を与えるイベントの継続的な実施は有効であることが分かった。またそれと同時に一度競技から離脱したスポーツ経験者に対して、競技復帰を促進するには各ステージの特徴を捉えたアプローチが必要であることが明らかになった。

また、今回スポーツイベント運営を支援する存在としてボランティア参加者の現状と意識傾向の把握をしたが、ボランティア参加者にはその活動に対して自発的、積極的に関与する者ばかりでなくネガティブなイメージを持って活動する者が多いという実態が明らかになった。このように間接的に関与するスポーツ参加者には、その参加動機や他のボランティア参加状況なども考慮して、各種スポーツイベントを通じたスポーツ参加を進めていかなければ、地域におけるスポーツの普及には逆効果である可能性が示された。

キーワード：スポーツイベント，ラグビー，再社会化，ボランティア，まちづくり

*　大阪国際大学　〒570-8555　大阪府守口市藤田町 6-21-57
**　大阪体育大学　〒590-0496　大阪府泉南郡熊取町朝代台 1-1
***　近畿大学　〒577-8502 大阪府東大阪市小若江 3-4-1
****　神戸大学大学院　〒657-8501 兵庫県神戸市灘区六甲台町 1-1
*****　名古屋大学大学院　〒464-8601 名古屋市千種区不老町

Empirical research on the relationship of the impact on the city development in the local area and sporting event to promote the re-socialization.

―About an effect of high school rugby tournament for Old boys as a regional activation sports event.―

TATSUYA FUNAKOSHI * JUNYA FUJIMOTO**
MASAKI NAGAMATSU*** MAKOTO CHOGAHARA**** KOU SASAKI*****

Abstract

The purpose of this study, sport athlete who once quit the sport, is to examine the effect of the sporting event held in order to return to competition (re-socialization). Through the sporting events held, the effect of local activation increases a person to return to the competition is can be expected. And, it is to examine whether there is a relationship with the city development by sport in the local area and the participants of sports volunteers held sporting event to support the event management.

Sports experience who quit competition that is to participate in a sporting event, which provides opportunities for return to sport behavior, who often thought to join event then continue to.

In this study, to continue to hold events that provide opportunities for return to sport behavior was found to promote the return to more sports activities. Furthermore, in order to promote sports experience competition return to quit sports, it has been found is needed approach considering the characteristics of each stage.

Also, the results in this study to examine the attributes and awareness trends volunteers to help the management of sporting events, the volunteers participating in sporting events, it has been found that a person is often volunteer activities with a negative image .

From such a result, event organizers are required to grasp the participation motivation, other volunteer activities experience of volunteer staff. Also, it is necessary to understand the need for the event held in volunteers. If it is not that way, it might be a reverse effect on sports promotion in the local area.

Key Words : sports event, rugby, re-socialization, sports volunteer, city development

* Osaka International University 6-21-57tohda-cho, moriguchi, Osaka, 570-8555
** Osaka University of Health and Sport Sciences 1-1 Asashirodai, Kumatori-cho, Sennan-gun Osaka 590-0496
*** Kinki University 3-4-1 Kowakae, Higashiosaka City, Osaka 577-8502
**** Kobe University graduate school 1-1Rokkodai-cho, Nada-ku, Kobe, 657-8501
***** Nagoya University graduate school Furo-cho, Chikusa-ku, Nagoya, 464-8601

1．はじめに

我が国におけるスポーツ振興に関する施策は 1961 年に制定された「スポーツ振興法」によって定められ、国民が自主的にスポーツを実践できるような諸条件の整備については国及び地方公共団体の任務であると定められた。さらに 2011 年新たに「スポーツ基本法」が成立して、スポーツは国民が生涯にわたり心身ともに健康で文化的な生活を営む上で不可欠のものとして捉える上で、「新たなスポーツ文化の確立」が求められている。地域におけるスポーツ振興によって、スポーツを通じた健康づくりや他者とのつながりを構築するといった地域住民が個人的に享受できるメリットを生み出すことはすでに十分な認識を得ている。しかし近年における人々のスポーツに対する関わり方には、この従来から認識されている「するスポーツ」という捉え方だけでなく、「見るスポーツ」、「支えるスポーツ」といった様々な側面からの関わり方が指摘されており、それらの関わりを通して現代社会の地域における「少子高齢化」、「過疎化」、「希薄化した人間関係」、「地域への愛着心の欠落」、「若年者の運動離れ」といった様々な社会問題の解消を目指すことが求められている。

一般的にスポーツ実施やスポーツ観戦は人間の学習過程であり、他者との相互作用やスポーツに関する知識や価値、技術を身につけるプロセスを「スポーツの社会化」と定義されている。しかし、我が国におけるスポーツ振興システムにはスポーツ参加者の連続性や継続性を確保する仕掛けがない点を長積（2011）は指摘しており、スポーツに参加した者でも一度離脱をすると再び競技復帰する機会が乏しく、スポーツ競技者の長期的な継続行動は難しい。

そこで昨今、各地で開催されている各地域自治体などが主導する地域スポーツイベントは地域住民に対してスポーツとの関与を促すきっかけとして個人レベルのメリットだけでなく、それらイベント開催にともなう地域産業に対する経済的効果をもたらすため地域活性化に各地域自治体の寄せる期待は大きい（山口，1996；川西・野川，2002）。その一方で、多様なスポーツイベントの乱立によって参加者確保が困難になってきたり運営経費の削減が迫られたりといった課題から、工藤（2006）はスポーツイベントによってどのような効果を得るために開催するのかという戦略性やビジョンの必要性を述べている。

そこで地域スポーツイベントを活用した地域活性化策の初期段階として、自らスポーツに参加する者や間接的に参与する者の拡大が必須であり、現在継続的にスポーツ活動を行っている地域住民の動向把握だけでなく、現在スポーツ活動を実施していない層に対するスポーツ振興の促進についての検討が求められる。

加賀ら（2002）は、この現在スポーツを実施していない中高年者層を「潜在的スポーツ参加者」として捉えて、そのニーズに対応した種目、施設・設備、グループ・クラブ、指導者、指導法などの開発・整備の必要性を述べている。この「潜在的スポーツ参加者」に該当する住民層には、学校教育における体育などの活動を除き過去を通じてスポーツに関わる機会がなかった者と過去にスポーツ実施経験があるものの現在は実施をしていない者に分類できる。

地域におけるスポーツ関与者増加にはこれらの潜在的スポーツ参加者のスポーツ活動に対する関心の高まりが不可欠であり、その関心の高まりが自らのスポーツ活動への実践・維持へと移行をしていく「行動変容のステージモデル」が一般的であり、そのステージモデルの「無関心期」に属する者が多数を占めると予測される前者よりも「関心期」や「準備期」に属する者が多く存在する後者に対するスポーツ競技復帰（再社会化）を促進する機会の創出とスポーツ参加の定着に繋がる効果的なアプローチ手法の確立の方が優先的に検討をなされるべきであろう。

そして、その潜在的スポーツ参加者の掘り起こしはその当事者だけでなく、同時に身近な他者に対するスポーツ活動実施に影響を与えると考えられ、家族や知人に対する同様のスポーツ関与機会の提供とさらには次世代の子供たちのスポーツ参加に繋がるという効果も期待できる。

このような潜在的スポーツ参加者にスポーツ参与の機会を提供するスポーツイベントとして 2004 年から継続的に開催されている「マスターズ甲子園」が実例として挙げられる。マスターズ甲子園は高校在学中に硬式野球部に属し、甲子園大会出場を目指した選手、マネジャーなどに出場資格者があり、現在もあらゆるレベルで野球を競技している者もみられるが、日常では競技から離脱しておりこの大会への出場が競技を再開するきっかけとなっている参加者も多い。

このマスターズ甲子園は回数を重ねるにつれて、課題の出現とその改善を繰り返すことで充実したスポーツイベントとして定着をしてきており、本大会を目指す予選参加校の増加とともに多くの本大会出場者を生み出してきている（表１）。またこのスポーツイベントは多くのボランティアによってその運営が支えられており、グラウンド内外に配置された様々な役割分担を請け負ったボランティアスタッフの存在がみられる。

ボランティアスタッフには高校時代における野球部への所属経験がない者やスポーツ競技経験がない者も多く含まれており、その参加資格には明記がなく「野球や甲子園が好きな方、元球児や母校を応援したい方、野球に詳しくなくてもボランティアに興味がある方（マスターズ甲子園公式ホームページより抜粋）」に対して大会運営を支援するボランティア参加を呼びかけ

ており、継続的なボランティア参加者が多くみられることも特徴的である。

このようにスポーツイベントの開催には競技者のみが個人的なメリットを享受するだけではなく、イベント運営を支援する者に対しても様々な精神的な充足感を与える効果が期待でき、山口（2004）はそのようなスポーツボランティアの存在、活躍が地域におけるスポーツイベントを支えておりさらにその結果スポーツのまちづくりに及ぼす影響を指摘している。

（表 1）　マスターズ甲子園 11 年間の大会参加者動向

開催年	開催日数	予選参加校	本大会出場人数
2004	1 日	82 校	140 名
2005	2 日	108 校	480 名
2006	2 日	157 校	657 名
2007	1 日	82 校	353 名
2008	1 日	107 校	376 名
2009	1 日	168 校	346 名
2010	2 日	288 校	702 名
2011	2 日	290 校	726 校
2012	2 日	282 校	767 校
2013	2 日	249 校	744 校
2014	2 日	260 校	737 校

（マスターズ甲子園実行委員会　調べ）

このマスターズ甲子園はすでに全国規模のマスターズスポーツイベントとして定着をしてきた感があるが、それと同様に、高校ラグビー選手のメッカと称される東大阪市・近鉄花園ラグビー場でも毎年開催されている「昔なつかし高校 OB 交流戦（以下、高校 OB 交流戦）」は、大阪府下の高校を対象に 2005 年から数えて 10 回目の開催となり、年々増加しながら現在では 12 チームの参加がみられ、その大会開催のきっかけは大阪府下数校の高校OB達の発案で始まったものである。

その一方で、ラグビーの競技人口の減少傾向が進み、若年者のスポーツ離れ、他競技種目への人気集中、ラグビーに対する「危険」、「痛い」、「難しい」など、ネガティブなイメージがラグビー離れを招いていると考えられる。

こういった現状により、今大会の参加校の中には、すでに統廃合によって現存しない高校のチームがあったり、名称変更された高校が旧名称・旧ユニフォームによって出場するケースなどがみられたりするこの大会では、各チームの登録人数には制限がなく、試合中の選手交代も随時自由に行なえることが特徴であり、勝敗や順位などにこだわらずプレーを楽しむことを主眼に置いた大会運営内容となっている。

この高校 OB 交流戦における継続的な動向調査を通じて、このスポーツイベントにおける出場者の意識調査より、過去にラグビーを競技しておりながら、現在競技から離れたスポーツ活動経験者がこの大会をきっかけに、毎年大会出場するようになったり、この大会以外でもラグビーの競技復帰をしたりする例が多く見られる。

そこで高校 OB 交流戦に着目して、その出場者に対する意識調査を通じて、本大会への大会参加動機や大会に対する評価や満足度、今後の継続的な参加意思といった意識動向を把握することは、さらに新たな「潜在的スポーツ参加者」の掘り起こしに繋げる手がかりを得られるという期待ができる。また、地域スポーツイベントに参加するボランティアのスポーツ競技に対する意識や今後のスポーツイベントへの関わり方に対する意識などを把握することは、直接的に競技参加をする者だけでなく間接的な参与者も含めた地域に社会的効果を及ぼすスポーツイベントのあり方に関する手がかりが得られる。

一般的にラグビーという競技種目は、グラウンド上に最も多くのプレイヤーを要するスポーツであり、競技をすることによって怪我や損傷の多い種目であるため、一度競技生活から離脱したら競技に復帰することが困難なスポーツ種目の一つである。その競技特性を考慮すると、ラグビーにおける潜在スポーツ参加者の意識調査を通じた動向把握には他のスポーツ競技における応用も期待できると考えられる。

2．目的

本研究の目的は過去のスポーツ競技経験者に対して、再び同一種目への競技復帰(再社会化)を促すスポーツイベントの開催が競技復帰者の増加やイベント開催地周辺においてスポーツを通じた地域活性化にどのような効果をもたらす可能性があるのかについて検討することである。

現在競技から離脱している競技経験者に復帰機会を提供するスポーツイベントにおける出場者の参加動向や意識傾向、今後の競技継続意思の関連性を把握することで、開催イベントが競技離脱者に対してどのような競技復帰を促す効果があるのかについて明らかにする。

また、そのようなスポーツの再社会化を促進するスポーツイベントの開催が大会運営を支援するボランティアといった競技者以外の参与者を巻き込むことで地域におけるスポーツを通じたまちづくりにどのような影響を与えることが期待できるのかを検討する。

３．方法

本研究では、ラグビー競技経験を持つ中高年齢者を対象としたラグビー競技イベントに着目をして、そこでの出場者に現在のラグビー競技状況や競技実施に関する意識傾向を把握するための調査を行った。特に現在継続的に競技実施をしていない者を「潜在的スポーツ参加者」のサンプルとして、同一スポーツイベントにおける出場者であるが日常的に競技活動を実施していない者の競技参与に対する意識や今後の競技継続意思の有無などについて調査をして、それを日常的に競技実施している者との比較を行った。

調査は 2014 年 4 月 27 日に大阪・近鉄花園ラグビー場にて開催された「第 10 回昔なつかし高校ＯＢ交流戦」出場チーム（12 校）の出場選手に対して無記名式の調査用紙（A4 用紙 3 枚）を配布、その場で回収を行なった。

また、ラグビー競技イベントの運営をサポートする地域スポーツボランティアの意識傾向を把握するために 2014 年 12 月 27～28 日に同じく近鉄花園ラグビー場にて開催された「第 94 回 全国高等学校ラグビーフットボール大会（以下、全国高校選手権大会）」における大会ボランティア参加者に対してアンケート(A4 用紙 3 枚)による意識調査を行ない、さらにボランティア参加者の意識動向把握のための比較サンプルとして同大会に観戦目的で訪れた大会観戦者に対してスポーツイベントに対する大会運営への参与に関する意識について調査を行った。

これら２種類の調査結果について統計アプリケーションソフトにより基本統計量を算出した後に、各変数との平均値の差の検定（ｔ検定）ならびにクロス集計などを行い、ラグビー競技経験者に競技復帰の機会を提供するスポーツイベントの開催効果について分析・検討を行なうとともにラグビー競技イベントの大会運営支援を行うボランティア参加者の現状について整理と今後の課題について把握をして、ラグビーを活用したまちづくりのあり方について検討を行った。

４．結果及び考察

４－１．調査対象者の属性

本研究における調査対象者として、高校 OB 交流戦出場者 291 名を過去に本大会への参加経験がある者と初めて参加した者に分類をした。さらに日常的にラグビー競技をしている者と日常的に競技していない者に分類して、表２のようにその属性によって「復帰定着群」「定着途上群」「潜在復帰群」という３つのグループに分類をした。

(表 2)高校 OB 交流戦出場者調査対象者の属性

	日常的競技実施者	日常的競技非実施者	合　計
OB交流戦参加経験者	90名	101名	191名
		定着途上群	
OB交流戦初参加者	31名	69名	100名
	復帰定着群	潜在復帰群	
合　計	121名	170名	291名

また、「第 94 回 全国高等学校ラグビーフットボール大会」における大会ボランティア参加者調査については、ボランティア参加者 106 名（男性 61 名、女性 45 名）から回答が得られ、95 名(89.6%)の者が自身のラグビー競技経験はなかった。そしてボランティア参加者の比較対象者として大会観戦者 391 名(男性 275 名、女性 116 名)よりアンケート調査に対する回答を得て、観戦者におけるラグビー競技経験者は 144 名(36.8%)であった。

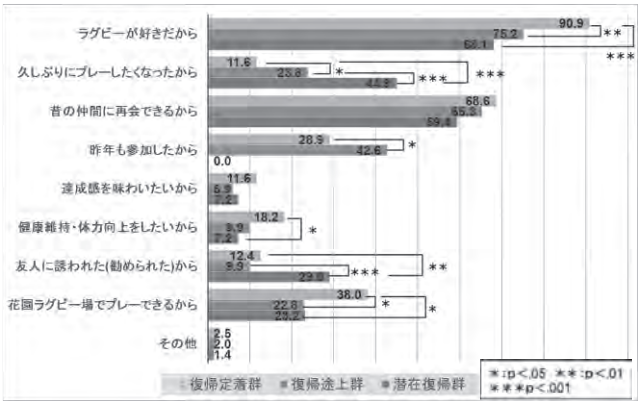
４－２．各群別の大会参加の理由

高校OB交流戦出場者の３群に対して大会出場の理由について尋ねたところ、「ラグビーが好きだから」という回答が他の要素に比較して３群ともに高かったが「復帰定着群」が特に高い数値を示した。

「久しぶりにプレーしたくなったから」や「友人に誘われた(勧められた)から」という理由では「潜在復帰群」が他の２群と比較して高い数値を示し、本大会開催という機会があることや友人の存在が「潜在復帰群」に対する競技再開のきっかけとなっている傾向がみられた。

また、「花園ラグビー場でプレーができるから」という理由は、他の２群と比較して「復帰定着者」に高くみられる傾向から、復帰定着をしている競技者にとって花園ラグビー場での競技参加が競技を継続する上で特別な意味を持つ行動であることを示唆した結果となった。

さらに、「昨年も参加したから」という理由は「復帰定着群」よりも「復帰途上群」の方が高い数値を示し、日常的に競技を行なっていない者でも本大会への継続的な参加が競技行動との接点となっている可能性がみられた（図１）。



(図１)各群別の大会出場理由(複数回答:%)

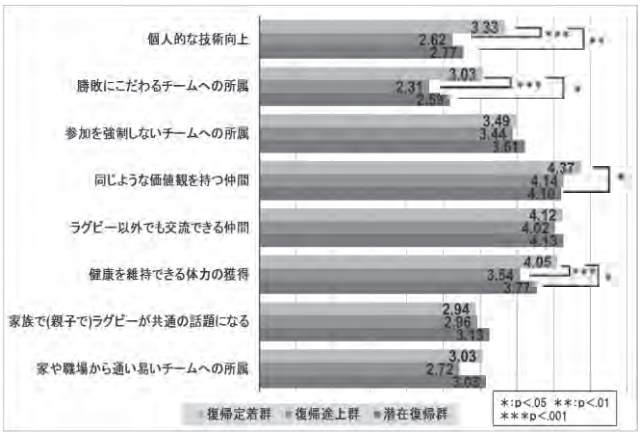
４－３．各群別の競技実施時の重視する項目

高校OB交流戦出場者全員にラグビーを競技する際、どのような要素を重視するかについて、図２の各項目に対して「1．全く重視しない」から「5．かなり重視する」まで５件法で尋ねてその平均値を算出、比較した。

その結果「個人的な技術向上」や「勝敗にこだわるチームへの所属」、「健康を維持できる体力の維持」の３項目については、復帰定着群が他の２群に比べて高い数値を示し、競技性に関する項目について重視している傾向がみられた。

３群間で有意差はみられなかったが「同じような価値観を持つ仲間」や「ラグビー以外でも交流できる仲間」といった競技性には関連しないが競技実施を通じて他者との関わりを重視する傾向が出場者全体からみてとれた。

このように、それぞれのステージに属する競技経験者の特性を理解することが競技復帰を促すに当たり重要であると考えられる。

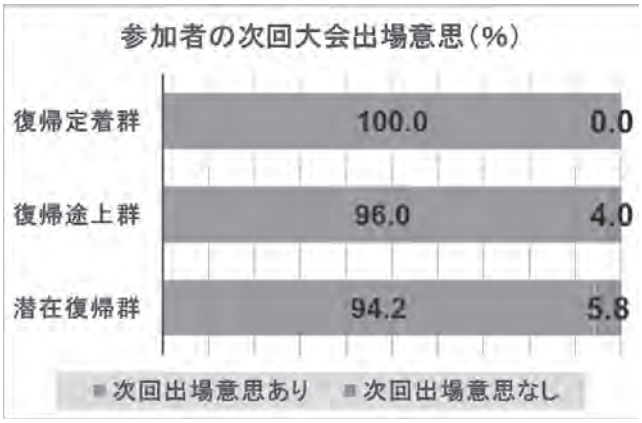


(図２)各群別の競技実施時の重視する項目

４－４．大会参加者の競技継続意思

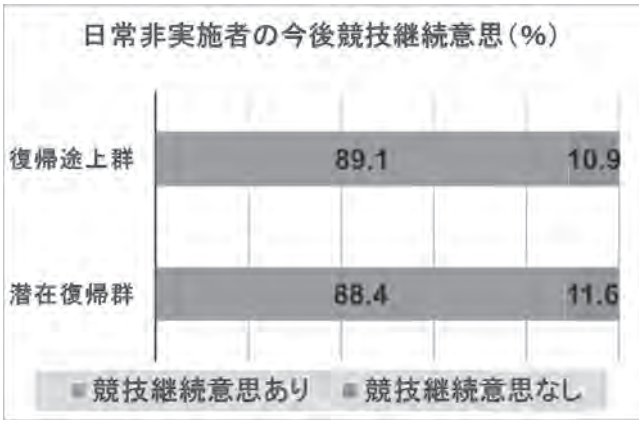
今回の高校OB交流戦出場者に次年度大会への出場意思の有無について尋ねたところ、「復帰定着群」は121名全員が「次回も出場する意思あり」と回答し、他の２群でも９割以上の者が同様の意思を表示していた（図３)。

この結果から本大会への出場が以降の大会への継続出場につながり、日常的な競技実施を促進する機会を提供している結果が得られた。



(図３)大会参加者の次回大会への出場意思(%)

また、現在、日常的に競技をしている「復帰定着群」を除く２群に対して、本大会出場以降に競技を継続する意思があるかどうかを尋ねたところ、両群ともに９割近くの出場者が「競技継続の意思がある」と回答しており、日常的に競技を実施していない者が本大会への出場をきっかけとして、それ以降の競技再開に向けた意思に対して強く影響をしている傾向がみられた（図４)。



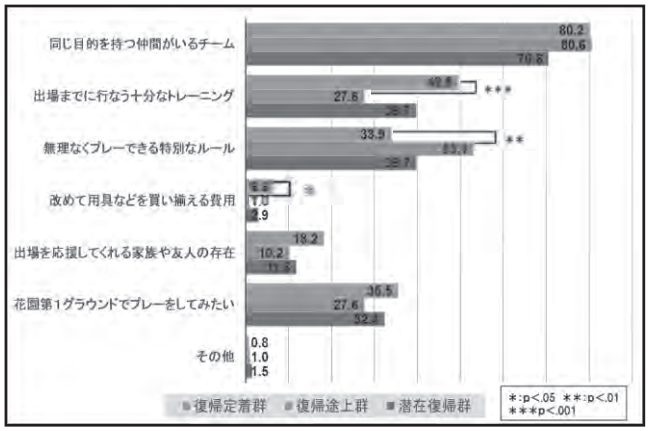
(図４)日常競技非実施者の今後の競技継続意思(%)

４－５．各群別の大会出場に必要な条件

出場者全員に今後高校OB交流戦に出場するに当たって必要な条件について、複数回答可として尋ねたところ、他の要素と比較して「同じ目的を持つ仲間がいるチーム」が３群とも高い数値を示し、競技実施時に重視する項目と同じ傾向を示した。

「出場までに行う十分なトレーニング」と「無理な

くプレーできる特別なルール」の競技実施に関連する2つの要素について「復帰途上群」が特徴的な回答を示し、前者については他の2群に比較して最も低く、後者については逆に他の群より高い数値を示した。これは日常的には競技を実施しておらず競技から離脱している「復帰途上群」属する者が本大会への出場経験を踏まえて抱えている、「復帰定着」に移行していく過程における、競技環境の整備に対する課題が示されていると考えられる（図5）。



(図5)各群別の大会出場に必要な条件（複数回答：%）

4－6．大会ボランティアの参加経緯

全国高校選手権大会における大会ボランティア参加者に対して、今大会にボランティア参加をした経緯について尋ねたところ、自身の職業については「会社員」と答える者が半数近く(45.3%)みられた。

そして、そのボランティア参加者に対してボランティア情報の入手先や参加のきっかけを尋ねたところ「職場」「職場で誘われた」と挙げる者が最も多く、スポーツイベントにおけるボランティア参加の背景としては、競技種目やボランティア活動に対して自発的な興味を持って参加するケースよりも、職場や所属団体、自治会などの関わりから必ずしも自己意思ではなく参加している可能性が示された（表2、3）。

(表2)ボランティア情報の入手先(複数回答)

ボランティア情報入手先	n	%
職場	54	50.9
友人	15	14.2
地域広報誌	12	11.3
ＪＣ（青年会議所）	11	10.4
自治会	8	7.5
新聞雑誌	1	0.9
ﾎﾟｽﾀｰ・ﾁﾗｼ	1	0.9
その他	11	10.4

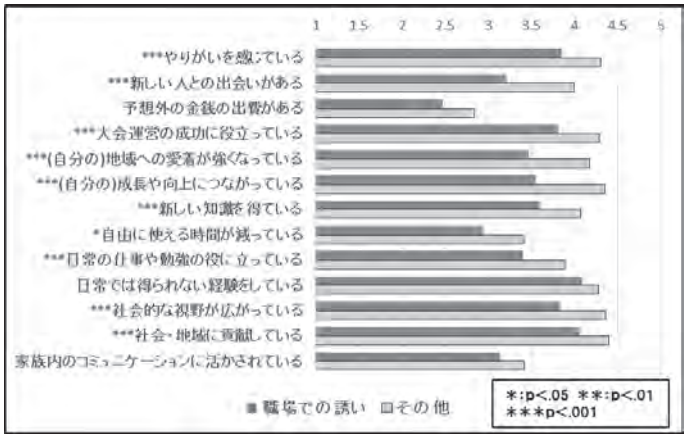
(表3)ボランティア参加のきっかけ

参加のきっかけ	n	%
職場で誘われた	47	44.3
ボランティア団体で参加	16	15.1
ボランティアに興味があった	11	10.4
ラグビーに興味があった	8	7.5
自治会で誘われた	6	5.7
友人に誘われた	6	5.7
ＪＣ(青年会議所)で誘われた	5	4.7
その他	7	6.6
合計	106	100.0

4－7．全国高校選手権大会ボランティアの意識

全国高校選手権大会におけるボランティア参加者に対して、自身のボランティア活動に対してどのような評価をしているのかについて、図6、7の各項目に対して「1．全くそう思わない」から「5．かなりそう思う」まで5件法で尋ねてその平均値を算出した。

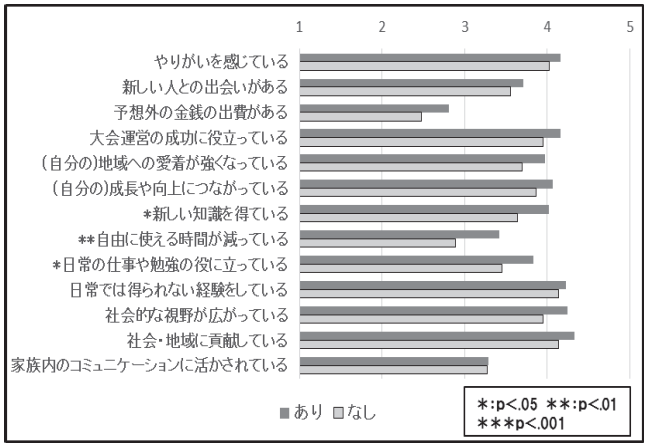
ボランティア参加のきっかけとして今回多くみられた「職場での誘い」によって参加した者とそうでない者では、大会ボランティア活動に対する自己評価の認識に大きな差がみられ、必ずしも能動的な参加、取り組みによるボランティア参加ではない者が多く関わっている現状がみられた(図6)。これは地域で開催される各種スポーツイベントを支えている運営スタッフでも同様のケースが考えられ、活動に参加することが、かえってネガティブな印象を与え、継続的なボランティアへの参加促進を妨げる可能性を孕んでいると考えられる。



(図6)ボランティア参加きっかけと大会ボランティア活動の自己評価（5件法平均点）

また、今回の全国高校選手権大会ボランティア参加者に対して、他のボランティア活動経験の有無別による本大会ボランティア活動に関する自己評価

の違いを比較したところ、他のボランティア活動経験がある者の方が高得点を示す傾向があり、他のボランティア活動経験者は自らの意思で能動的にボランティア参加をしている者が多く、地域スポーツイベントについても積極的に関与する姿勢がうかがえた。



(図 7)他のボランティア活動経験有無とボランティア活動の自己評価（5 件法平均値)

また高校ラグビー選手権大会に来場した者を対象として、スポーツイベントに対してどのような関与を望むかという意識を把握するために 2019 年我が国で開催されるラグビーワールドカップ(以下、RWC2019)をモデルとして、今大会のボランティア参加者と大会観戦者の 2 群について、その関与行動に対する意識の違いを比較した(表 4～6)。

両群ともに RWC2019 の開催についての認識は高いが、ボランティア参加者は RWC2019 への観戦に対して特に高い関心を示しておらず、ラグビーという競技種目について強い関心は持っていないが、近隣で開催されたらボランティアとして関与したいという意識が観戦者と比較して高い結果が得られた。これらの結果から、地域におけるスポーツイベント開催を支援するボランティアスタッフには、継続的に様々な分野での活動をする地域住民の関与が有効と考えられ、そこには自発的な意思によるボランティア参加を促すことが不可欠であると考えられる。

(表 4) RWC2019 開催を認知しているか？

	ボランティア参加者	大会観戦者
知っている	74.5%	78.3%
耳にしたことがある	16.0%	10.2%
知らなかった	9.4%	11.5%

(表 5)RWC2019 が近隣で開催なら観戦に行くか？

	ボランティア参加者	大会観戦者
ぜひ行きたい	37.7%	74.8%
条件合えば行きたい	36.8%	14.1%
わからない	17.9%	9.0%
行かない	7.5%	2.1%

(表 6)RWC2019 にボランティア参加を希望するか？

	ボランティア参加者	大会観戦者
ぜひしたい	28.3%	15.8%
条件合えばしたい	47.2%	35.3%
わからない	20.8%	25.5%
参加しない	3.8%	23.4%

5．まとめ

過去にスポーツ競技活動を行っており、その後競技離脱をしたまま現在継続的なスポーツ活動を行っていない者を「潜在的スポーツ参加者」と位置づけて、そのようなスポーツ競技経験者に対して再び競技参加を促す機会を提供するスポーツイベントの開催効果について検討を行なった。

潜在的スポーツ参加者には、いくつかのステージが存在して、「競技復帰に無関心の者」から「復帰潜在群」「復帰途上群」と分類したところそれぞれの意識には違った傾向がみられた。しかし、潜在的スポーツ参加者に対して競技復帰の機会を提供するイベントの開催をすることで、そこに参加する者が継続的参加意思を示す割合は大きく、復帰機会の提供は競技経験者の競技復帰を促す可能性を示し中高年者を対象とした競技経験者の復帰機会を与えるイベントの継続的な実施は有効であるという結果が得られた。またそれと同時に一度競技から離脱したスポーツ経験者に対して、競技復帰を促進するには各ステージの特徴を捉えたアプローチが必要であることも伺えた。

また地域において広くスポーツを活用したまちづくりを進めていくためには、スポーツイベントの開催によって直接競技に参加するスポーツ競技経験者の増加・定着だけではなく、間接的にスポーツ参与する人々も巻き込んだ運営をしていかなければならない。その間接関与者として、今回大会運営を支援する存在としてボランティア参加者の現状と意識傾向の把握をしたが、ボランティア参加者にはその活動に対して自発的、積極的に関与する者ばかりでなくネガティブなイメージを持って活動するものが多いという実態が明らかになった。

このように間接的に関与するスポーツ参加者には、その参加動機や他のボランティア参加状況なども考慮して、各種スポーツイベントを通じたスポーツ参加を進めていかなければ、地域におけるスポーツの普及には逆効果である可能性が示された。

本研究では、競技離脱したスポーツ経験者に対して再び競技復帰（再社会化）を促す機会を提供したスポーツイベントの開催効果について検討をして、競技復帰者の獲得が期待できる結果が得られた。しかし、その再社会化が次世代のジュニア層の競技参加に繋がるといった他者に及ぼす影響までは明らかにできなかった。そこで今後は、さらに地域スポーツイベントの開催によって、スポーツ再社会化が与える開催効果や課題の把握を通じて、潜在的スポーツ参加者のスポーツ実施・定着に向けた働きかけを促進するとともにその効果が他者に及ぼす影響によって、地域におけるスポーツを通じたまちづくりの可能性について明らかにしていくことが求められる。

参考文献

青木高、太田壽城監修、山口泰雄編著「健康スポーツの社会学」（2006）建帛社

長ヶ原誠、山口泰雄、池田勝「高齢者におけるスポーツ活動への再社会化に関する研究」（1992）鹿屋体育大学学術研究紀要　第７号

橋本純一編「スポーツの観戦学」（2010）世界思想社

加賀秀夫、石井源信、嘉戸脩、菊幸一、杉原隆、長見真、深見和男、宮内孝知、雨宮輝也「中高年者のスポーツ参加に関する社会学的・心理学的研究－第２報－」平成４年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告

川西正志、野川春夫編著、工藤康宏（2006）「生涯スポーツ実践論（改訂２版）」市村出版

木部克彦、四家秀治「ラグビーの逆襲」（2011）言視舎

木田悟、高橋義雄、藤口光紀「スポーツで地域を拓く」（2013）東京大学出版会

長積仁、原田宗彦編「スポーツ産業論第５版」（2011）杏林書院

山口泰雄（1996）「生涯スポーツとイベントの社会学」創文企画

山口泰雄編「スポーツボランティアへの招待　新しいスポーツ文化の可能性」世界思想社

この研究は笹川スポーツ研究助成を受けて実施したものです。

笹川スポーツ財団
SASAKAWA SPORTS FOUNDATION